

### ③訪問同行

#### 同行 1: マルホ

- ・利用者①：19:05-19:45
- ・80代女性。
- ・一戸建て。夫との2人暮らし。
- ・左麻痺あり。車椅子生活。1日2回訪問。
- ・バルーンカテーテル挿入中。
- ・車椅子でバスルームに移動。
- ・入れ歯をとって歯ブラシを渡す。歯磨きは自分でできる。入れ歯は看護師が洗浄している。歯磨き終了後入れ歯を再度装着。
- ・顔をタオルで拭く。
- ・トイレに設置されている手すりにつかまり、一度立ってもらい、ズボンを脱がす。その後車椅子に座り直してバルーンカテーテルのレッグバックを昼用から夜用（容量の大きいもの）に替える。
- ・装着する足もどちら側からベッドに入るかによって変えて装着していた。
- ・寝衣に着替えて、リビングに戻る。

- ・利用者②：19:50-20:00
  - ・70代男性。妻と2人暮らし。一戸建て。
  - ・脳梗塞後の後遺症で左麻痺あり。車椅子生活。
  - ・食事の準備とイブニングケアに来たが週末ということもあり、娘が来ていたのでケアはせずに終了。
- ・利用者③：20:10-20:20
  - ・80代女性。
  - ・アパートに居住。1人暮らし。糖尿病。
  - ・内服確認。
  - ・弾性ストッキングを脱ぎ、保湿クリームを塗布。
- ・利用者④：20:30-21:00
  - ・61歳男性。
  - ・妻と2人暮らし。一戸建てに居住。
  - ・前立腺がん終末期。リビングにベッド。モルヒネを持続ポンプで投与。
  - ・疼痛を確認。
  - ・ポンプの作動状況と投与量を確認。本人が腫瘍が皮膚のいろいろなところに出てきたと訴え、それを確認していた。
  - ・ベッド上で歯磨き、顔を清拭。足のマッサージをたっぷりのクリームで行っていた。リラックスのため。その後着替えをして、体位を整え終了
- ・利用者⑤：21:05-21:15
  - ・80代男性。
  - ・アパートに居住。1日2回訪問。妻と2人暮らし。下肢の静脈瘤。
  - ・弾性ストッキングを脱がせ、クリームの塗布。
- ・利用者⑥：21:20-21:30
  - ・91歳女性。
  - ・7階建てアパートの6階に居住（普通のアパートだが、比較的50代以上の方が多く居住している）、1人暮らし。糖尿病。
  - ・内服確認。朝分のセット。朝ご飯が冷蔵庫にあるかを確認。
  - ・弾性ストッキングを脱がせ、クリームを塗布。
- ・利用者⑦：21:35-22:00
  - ・90代男性。
  - ・一戸建てに居住。息子と2人暮らし。
  - ・家のいたるところに張り紙がしてある。
  - ・バルーンカテーテル挿入中。
  - ・下肢筋力の低下あり。歩行器で歩行。
  - ・寝室は2階であり、階段にはリフトが設置されている。
  - ・バルーンカテーテルの尿を破棄。
  - ・レッグバックを昼用から夜用に付け替える。寝衣への更衣介助。首には住所と名前が書いた名札をしていた。
  - ・寝室に洋服を持っていきながら、寝室のベッドサイドに水とコップをセット。
  - ・キッチンまで歩行器で移動し、歯磨きを見守る。入れ歯は看護師が洗浄。
  - ・内服を確認し、連絡ノートのコメントを読み、終了。



### 同行 2：イボンヌ，H

- ・利用者①：16:50-16:55
- ・80歳代くらいの女性。
- ・終末期の方がグループで住んでいる住宅？
- ・インスリン看護師打ち。
  
- ・利用者②：17:00-17:10
- ・80歳代くらいの男性。
- ・娘が来訪している。
- ・両下肢軟膏塗布。
  
- ・利用者③：17:15-17:20
- ・80歳代くらいの男性。
- ・訪問時お1人で過ごされている。
- ・インスリン看護師打ち。
  
- ・利用者④：17:20-17:40
- ・利用者③の方の上階に居住。
- ・70歳代くらいの女性。
- ・訪問時お1人で過ごされている。
- ・永久気管孔内の保清。
- ・ブラシを使って痰を除去。
- ・点眼介助。
- ・背部への軟膏塗布。

### 同行 3：レオニー

- ・利用者①：8:00-9:00
- ・80歳代女性。
- ・娘と同居。
- ・左麻痺あり、脳梗塞後。
- ・膀胱ろう使用中。
- ・生食 100ml を人肌に温める。
- ・清拭用の湯を汲む。
- ・カテーテルを通じて膀胱に生食を注入して膀胱洗浄。
- ・夜間に出た尿を破棄して新しいレッグバッグを接続。
- ・顔拭きタオルを渡す。
- ・脱衣介助後、臥位にて全身清拭。
- ・膀胱ろう挿入部包帯交換。
- ・右臀部にドレッシング剤貼用中、カテーテルが当たってスキントラブルが起きたと。
- ・靴下装着介助。レッグバッグを右下肢に装着。靴装着介助。
- ・背部を支えてもらいながら端座位へ。

- ・フェンタニルパッチ 50ug/hr (3日に1回貼り替え)を1枚前胸に貼付、古いものを剥がす。
- ・腕に痛みがありフェンタニルを使っているとのこと。
- ・着衣介助。下着はオムツではなく通常のもの。
- ・車椅子移乗時、右手で手すりにつかまってもらい立位へ、その間に下着とズボンを履く。
- ・点眼介助。
- ・入れ歯を渡す。
- ・両耳に補聴器装着。
- ・香水をつけるのを介助。
- ・寝室の片付け、ベッドメイキング。
- ・手書きでファイルに記録。

- ・利用者②：9:05-10:00
- ・男性、92歳。
- ・左半身麻痺。
- ・妻と同居。
- ・日本に2度行ったことがあると。
- ・バルーンカテーテル使用中。夜間帯の尿を破棄。
- ・顔拭きタオルを渡す。
- ・更衣介助。
- ・全身清拭。オムツ着用中。
- ・車椅子へ移乗。
- ・髭剃り介助。

#### 同行4：イボンヌ、K

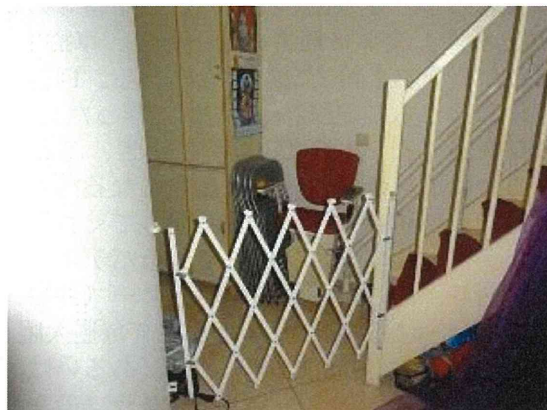
- ・利用者①：10:10-11:10
- ・50歳代、女性、独居。
- ・MS(多発性硬化症)。歩けないが他のことは比較的自立している。
- ・現時点でできることはそれほど多くないがコーヒーを飲みながら話すとのこと。
- ・起床を介助(若い方のため同席はせず)。
- ・ご自身でシャワー浴へ。
- ・立ち上がり時につかまるポールが室内にある。
- ・Copaxone(グラチラマー酢酸注射剤)を注射したとのこと。
- ・ポールにつかまって立位が取れる車椅子に移乗。

- ・利用者②：11:20-12:00
- ・40歳代くらいの男性。
- ・糖尿病、統合失調症。喫煙者。
- ・右第一足趾切断済み、深い傷がある。
- ・神経障害で痛みはない。
- ・真空療法を行っている(機械が接続されている)。
- ・週3回スポンジやドレッシングを交換している。
- ・真空が保たれるよう嚴重にドレッシングテープで保護。
- ・電源を入れると機械が吸引を開始する。
- ・通常圧力は125mgHG、痛みがあるときは75mmにすることもある。

#### 同行5：マルホ

- ・利用者①：8:10-9:05
- ・事務所から2.2km。
- ・89歳女性。

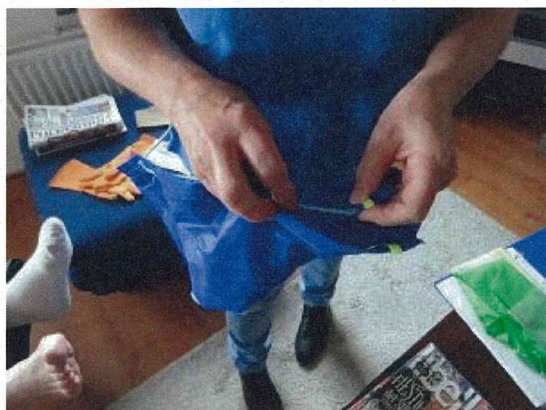
- ・長屋住まい。娘夫婦と孫（男）の4人暮らし。娘夫婦は働いている（ともにフルタイムで働いていたが、娘は母の介護のため週30時間に減らした。ロッテルダムで働いている。）孫は学校に行っているが合間を見て、祖母の様子を見に来ている。
- ・4～5年前より認知症を発症。私たちが来ていることもその場で理解はするが、扉を1回閉めるとすぐに忘れてしまうような状態。おそらく徘徊等もあった様子。杖歩行。甲状腺機能の薬、利尿剤、抗血液凝固剤を内服している。
- ・毎日朝8:00から1時間のケアで訪問している。
- ・普段は娘が仕事に行くための準備があるのでビュートゾルフ訪問中に家事と母の朝食と薬の準備、母の昼食を準備して仕事に行っている。本日はオランダの休日のために仕事はお休み。
- ・利用者はビュートゾルフが訪問するまではベッドに横になっている。（寝室は2階）看護師が声をかけ、起きる。時として起きない場合もあるが、無理に起こそうとはせずにあくまでも利用者のペースに合わせている。
- ・ゆっくりと起き上がり、シャワーの準備をする。利用者は髪がとても長い。髪を洗うのは日曜日のみ。ケアの順番は儀式的に行い、毎日同じ事をするようにしている。①トイレ、②歯磨きをする、入れ歯を洗浄し装着、③シャワー、④着替え、⑤1階にリフトを使って降りる、⑥ソファに座って朝食を食べる。
- ・看護師はケアを儀式的にすること、できるだけ本人のペースで行い、できているところは決して手を出さず、本人のできる力を最大限発揮できるようにしていると。
- ・娘は出かけるときはソファの近くに必要なものをセットし、「トイレはここだよ」と何回も繰り返し、階段と玄関には通れなくするために柵をセットしていた。
- ・利用者家族との会話：
  - ・ Q：ビュートゾルフに満足していますか？また、どのようにしてビュートゾルフと出会いましたか？
  - ・ A：母の認知症が始まり、介護を家族みんなで協力しながらやってきていたが、介護で仕事と家庭の両立がとても困難で、とてもストレスがたまってきていた。かといって、ナーシングホームに行ってもらうのは本人も嫌だし、自分も嫌だった。どうしようもなく、昨年10月にビュートゾルフに電話をして説明に来てもらったが、本人がどうしても他人の手は借りたくないと拒否。そのときはいったん断ったが、やはり娘がストレスを感じていたので、何回も言い聞かせ今年の1月に再度電話をして説明に来てもらった。そのときは本人も納得してサービスを開始。今では、ビュートゾルフなしでは生活できないくらいとても頼りにしている。
  - ・ Q：1週間に何人くらいのビュートゾルフの看護師が来ますか？
  - ・ A：大体、3人くらいの看護師が交代で来てくれている。本当は毎日同じ看護師が良いが、そうも言ってもらえないので、お願いしている。皆さん良い人で本当に助かっている。



- ・利用者②（5月22日夜に訪問した利用者⑤と同一人物）：9:10～9:20
- ・車で5分、880m。
- ・薬のチェックとセット。
- ・弾性ストッキング着用。

・利用者との会話：

- ・ Q：ビュートゾルフに満足していますか？
- ・ A：とても満足している。不安なことがあっても電話すれば丁寧に教えてくれるし、とても助かっている。



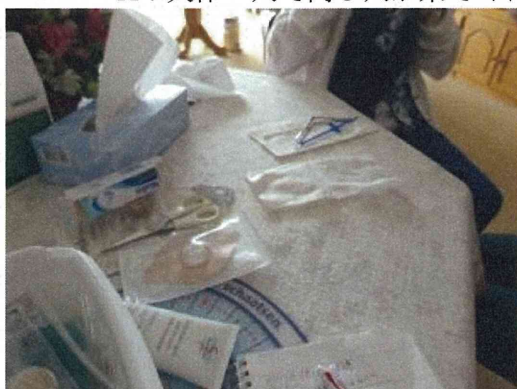
- ・利用者③：9:50～11:00
- ・前のお宅からは車で5分だが、訪問の約束までに時間があつた。
- ・60歳男性。
- ・マンションの3階に居住。
- ・妻と息子と3人暮らし。妻は働いており、日中留守の事が多い。大きな犬を飼っている。
- ・2年前にALSと診断。全体に筋力の低下あり。車椅子使用。話すのはとてもゆっくり。飲み物はとても軽いコップだが、それも持てないこともある。PEGをは昨年11月に造設（まだ、食事は経口でできるが、体力のあるうちにPEGを予防的に作った）。
- ・ビュートゾルフを週4回（3回は定期的にいき、あと1階は妻のストレス軽減のために必要性に応じて訪問している）利用。妻の働いている間をなるべく誰かの目があるようにするためにビュートゾルフ訪問後は夕は友人が訪問、妹が1日訪問してくれる。
- ・インフォーマルケアとして全国展開しているバディーネットワーク（Buddy Network）というボランティアの組織があり、そこから数名のバディー（仲間、よい友人）候補と面接して気の合う人を決めて、その人がバディーになる。60才の女性で毎週火曜日の10-14時まで付き合う。町に出てカフェでコーヒーを楽しんだり、映画に行くとか、あるいは家で音楽などを聞いたりして過ごしている。
- ・その他に学生仲間であった友人やスポーツクラブの水泳仲間が定期的にやってくる。
- ・ケアは家政の手伝いも含めてPGB（地方自治体管轄の社会法による該当する個人別予算）でカバーされている。
- ・ペディキュアをしていた人はフローレンスというケア提供者からの派遣介護人で、この費用もPGBから支払われる。

- ・本人の性格は、とても明るく、前向きな方で治験等にも積極的に参加している。経済状態はもともとオランダの大手携帯電話会社の人事関係に勤めており、58才の時に退社。運動療法関連の企業を経営していた友人の企業で働き自分も実験的にいろいろ作業を試みたりした。比較的裕福である。
- ・本日は妻が休みで在宅していたが妻のストレス軽減のための訪問であった。
- ・訪問時、足のケアをする業者と掃除をする業者がいた。本人に様子を聞き、今日のシャワーどうする？と聞くと、本人は気分も良いので入るとの返答。
- ・車いすで浴室に移動。電動の髭剃りでひげをそる。歯磨きは電動ハブラシを使って本人が磨き、うがいはコップを持つ手が不安定な場合に介助。
- ・その後電動のシャワーチェアに移動し、介助でシャワー浴。
- ・終了後、再度車椅子に移動。紙パンツを着用後、保湿クリームを全身に塗布。その後 PEG のケア。その後寝室へ向かう。寝室で着替えをする。
- ・妻不在の場合には緊急通報のベルを腕につける。本日は、ベッド上での移動が楽になるように介助用具（ナイロンシーツ）を持ってきていて妻に説明。妻に寝てもらい、介助方法を教える。その後購入先を教えていた。
- ・リビングに戻りコーヒーをのみながら記録をしたり話をしたりしていた。
- ・看護師は記録の時間はケアの中にしっかり組み込むべきだといっていた。
- ・利用者家族との会話（利用者が別室にいるとき）：
  - ・ Q：この病気は進行性のものであるが、今後のことをどう考えていますか？また、家族でどう話しているのですか？
  - ・ A：進行性ではあるが、今の状況を受け入れてその場その場で判断をしていくようにしている。今の時間を大切し、今できることを一緒に楽しむように努力しているが明るい将来でないことは確かなので、女友達との付き合いも忘れないようにしているとのこと。車椅子対応されたフォルクスワーゲンミニバスを時々レンタルして週末の小旅行をしている。この夏は車椅子対応キャンパーをレンタルしてフランスに別荘を持つ二人の友人の家を廻る休暇を計画しているが、そうした別荘自体が車椅子対応は無いだろうから少し懸念を持っている。私も仕事をしているので、ストレスのない程度にサービスを使っていきたい。3人の子供（21、20、18？）は、父の疾病を夫々の見方をしているようで、無視したいと思う子やできるだけ助ける子もいる。

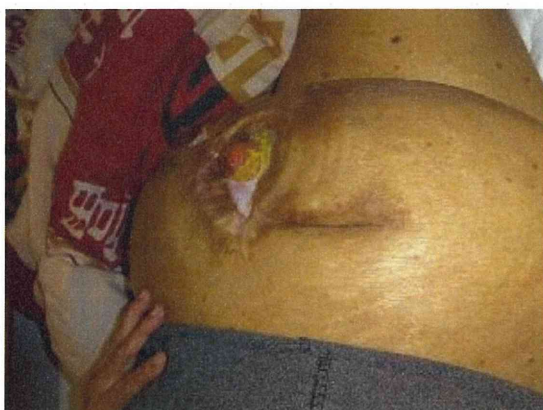


- ・利用者④：11:05-11:30
- ・5月22日夕方にイボンヌ、Hと同行訪問した利用者④と同一人物。
- ・4年前に喉頭がんで手術を行い、永久気管孔造設。
- ・月曜日から金曜日まで1日1回訪問。
- ・土、日はセルフケアで行っている。
- ・つらいときは電話して訪問してもらっている。
- ・気管孔のケア：保湿クリームを背中に塗る。背中以外のところは自分で塗ってもらう。
- ・利用者との会話：
  - ・ Q：ビュートゾルフのケアに満足しているか？
  - ・ A：とてもハッピーにさせている。最初にケアが必要になったときはとても不安で電話しようとしても話せないで電話ができなかったが、電話をするときは受話器を叩いて知らせる方法を教えてくれて電話することもできたし、いつでも安心して過ごすことができています。

- ・ Q：1週間に何人の人が来ますか？
- ・ A：大体二人で同じ人が来てくれている。



- ・ 利用者⑤：11:45-12:25
- ・ 70代女性。
- ・ 集合住宅に居住。夫と2人暮らし。2階には子供夫婦と孫が住んでいる。子供夫婦も介護を手伝っている。
- ・ 週5回（月曜日～金曜日）、1日1回訪問している。
- ・ 大腸の病気でストマを造設。肥満によるものか、腹部が垂れ下がり、それが原因でストマトラブルがよく起きている。この日の訪問はチーム内に急な休みが出たため、最近ではケアに行っていない看護師の訪問になった。
- ・ 家の中はかなり汚かった。玄関からすぐの部屋に夫のベッドと本人のベッドが並んで置かれており、この日は夫がまだ寝ていた。
- ・ 看護師は久しぶりの訪問なので置いてあるビュートゾルフのファイルを開いて情報収集を行い、様子を聞いていた。痛みもあるようで、痛み止めのことについてもたずねていた。
- ・ 物品を準備して、パウチ交換を行う。以前は今よりも太っており、漏れる回数も多かったが、病院のストマ専門看護師と連携をとりながら工夫を重ね、最近ではあまり漏れなくなってきた。
- ・ 病院の看護師と連携：写真をとって送り、本人が病院に行き診てもらった結果を病院看護師から受け取る。また、一緒に病院に行くこともある。これはサービスの中に入っている。
- ・ パウチ交換後、パウチが皮膚に当たらないように保護をして、クリーム塗布。看護師がテープを貼り忘れていたので、利用者がそれを指摘し、貼付していた。
- ・ 「パウチがよくくっつくまで、しばらく静かにしてね。」とベッドに寝てもらい、ゴミをもって家を出て、ゴミ捨て場にゴミを捨てる。



#### 同行 6：イボンヌ. K

- ・ 利用者①：9:45-10:00
- ・ 50代男性。
- ・ 集合住宅の1階に居住。家族と同居。



- ・4ヶ月前にバスタイルで切って左下肢に10cmほどの傷ができてしまった。糖尿病もあり、傷の治りはあまりよくなかった。以前はバキュームセラピー（創部をドレッシングで封鎖し、低圧で持続的に排液をドレナージする治療法、詳しくは後述の同行利用者③を参照）も行っていた。痛みもあり、適宜痛み止めを内服している。最近傷がよくなってきた。5cmほどまでに縮小。以前は傷を見るのが怖くて、何もできなかったが、最近では傷を見られるようになってきた。
- ・訪問は週2回（火、金）。
- ・傷の処置：洗浄＋軟膏＋テープ。
- ・傷の経過も順調なので、そろそろケア終了する見込み。次の週に病院に受診したらビュートゾルフのサービスはもういらないだろうといわれるだろうと看護師が話し、次の週に傷の処置を教えるサービスを終了する旨を伝えている。本人は、まだ、不安そうだが、最近では傷を見るのも怖くなくなってきたから、がんばってみようといっている。
- ・また、歩いて散歩に行きたいというと、看護師はまだ、完全に傷がふさがっていないから、歩き過ぎないように助言していた。



- ・利用者②：10:10-10:30
- ・移動距離は車で5分。
- ・47歳男性。
- ・友人のアパートの1室に仮住まい（不幸なことが続き、無職になり、離婚してしまった）。
- ・今年の5月3日に急に腹痛があり受診したところ、腸に感染が起こっていた。また、腫瘍もあり、急遽手術施行しストマ造設となった。
- ・家族に大腸がんになった人が3人もおり、自分もそうかと思って心配だったが、腫瘍は良性のもので安心した。
- ・病院で看護師が行うストマケアを2~3回見て自分でできると思い5月5日に退院した。しかし、まだ、セルフケアに自信がなかったため、病院にお願いしビュートゾルフに連絡してもらった。
- ・その後5月6日からケアが開始となった。最初の週は週3回訪問していたが、その次の週からは週2回に減らした。

- ・調子を聞きながら、本人の不安に答えたり、生活指導を行う。「下痢になりやすいから注意してね」と言っている。
- ・その後、利用者がトイレでストマパウチの交換を行っている手技を確認。
- ・もう、セルフケアができるとの事で本日サービス終了していた。
- ・その際に、満足度調査を行っていた。不満は聞かれなかった。(満足度調査の内容は別紙参照。)



- ・利用者③：10:45-11:45
- ・移動距離は1.7km、車で5分。
- ・看護師2人によるケア。
- ・40代男性。ケア施設に入居中（自宅は別にあり、そこに家族は住んでいてたまに帰る）。
- ・本来は遺伝性の病気であるが、5年前に発症した。バクテリアの感染症で脳に感染を起こし、痙攣発作、言語障害、失見当識症状を起こす病気。何ヶ月か前に痙攣発作のために病院へ搬送された際に、点滴の薬品がもれて右足背に大きな感染を起こした（医療事故）。
- ・その後自宅に帰りピュートゾルフのサービスを開始。状態はあまりよくなく、悪化しているとの事。
- ・週3回訪問。緊急用ベルを持っている。
- ・歩行は不安定でベルを押してもなかなか出てこられない。
- ・中に入ると1人はシャワールームに利用者と一緒に行き、テープとスポンジをシャワーで洗浄しながらはがし始める。かなり痛みがある様子で痛みを確認しながら丁寧に行っていた。
- ・もう1人の看護師はバキューム治療の物品準備を行う。
- ・シャワーで洗浄後、歩いてリビングまで行き、ソファに横になってもらい処置を開始。
- ・一見1人でできそうなケアだが、テープとスポンジを傷の形に合わせて切ったり、それを固定するのが大変そうである。きれいに固定を行い、バキュームセラピーの機械を装着して終了。最初は1で行ったが、やはり時間がかかりすぎると、テープを固定したりするのに指が届かなかったりしたので、2人で行くことにチームで決めたとのこと。
- ・この場合の保険請求は、1人分は普通の保険者に、もう1人分はPGBに請求するとのこと。

